

WH 疑問文におけるム系助動詞の統語的役割

*

渡辺 明
東京大学

1. WH 移動の消失

渡辺 (2001), Watanabe (2001, 2002) では、野村 (1996) の指摘する語順の変化をもとに、奈良・平安それぞれの時代において WH 疑問文がおおよそ (1) に示す構造をしていると論じ、奈良時代の係助詞「か」は WH 移動を引き起こす素性の実現したものと同定した。

- (1) a. 奈良時代: WH-力 [IP 主語-ガ/ノ ... t ...] Ø
b. 平安時代: [IP ... WH-Ø ...] Ø / ゾ / ニカ (アラム)

すなわち、奈良時代には、英語やハンガリー語に見られるように、WH 句が IP の外部へ移動していたのに対し、平安時代にはこの移動が失われているとしたのである。萬葉集と源氏物語からひとつずつ例文をあげておく。

- (2) a. 近江の海湊は八十ちいづくにか君が舟泊て草結びけむ (1169)
b. いと怪しき御心の、げに、いかで、ならはせ給ひけむ。(浮舟)

係助詞「力」は WH 移動を引き起こす素性に対応するものであるから、WH 移動が消失することにより不要になるはずで、事実、船城 (1968) で指摘されているように、その数は源氏物語において減少している。このことも含め、(3) にあげたような変化が、WH 移動の消失に付随して生じたものであることを上記諸論文では論じたのであるが、係助詞「力」は平安時代に入って完全に姿を消したわけではない。

- (3) 奈良時代から平安時代へかけてのその他の変化
i. WH 疑問文における係助詞「力」の減少
ii. 係助詞「力」の修辭 WH 疑問文へのかたより
iii. Yes-No 疑問文における係助詞「力」の消失
iv. 主部内在型関係詞節の出現

修辭 WH 疑問文にかたよる (3 ii) という傾向を示しつつ、「力」はまだ多数観察されるのである。この事態をどのように理解すればよいかという問題からまず手をつけることにする。

2. 平安時代における係助詞「力」

源氏物語における WH 疑問文の形式を、磯部 (1990) のデータに基づいてまとめると (4) のようになる。

(4) 源氏物語の「いかでか」「などか」を除く WH 疑問文の形式 (磯部 1990)

	用例数
a. WH-カ... Ø	176
b. WH-カ...ゾ	3
c. WH-Ø ... (V)-ニカ (アラム, etc.)	167
d. WH-Ø ...ゾ	180
e. WH-Ø ... Ø	?

(4 e) の形式は総数が不明だが、船城 (1968) の桐壺から夕顔までの四巻のデータを見ると一番数多い形式だと考えられる。とはいえ、(4 a) もかなりの割合を占めており、無視できない。磯部 (1990) のデータの重要な点は、船城 (1968) などとは異なり、文末に「ニカ (アラム etc.)」がくる (4 c) の形式を独立させていることで、WH 句に直接「カ」がつく場合を正確に把握するのに必要なステップである。

さて、磯部 (1990) は、WH 句に直接「カ」がつく場合 (4 a, b) を文末の形式によってさらに細分化したデータをあげている。それを再録するにあたり、文末が野村 (1995a) のいうム系助動詞 (ム、ラム、ケム、マシ、ジ) をとる場合とそうでない場合にわけて (5) に示す。

(5) 源氏物語で「カ」を伴う WH 疑問文 (磯部 1990)

文末	疑問	反語
ム	21	70
ケム	14	0
ラム	9	0
マシ	1	2
ムトスラム	1	0
ベカラム	3	0
小計	49	72
ムトス	0	1
ベシ	3	9
ベキゾ	2	0
ゾ	0	1
Ø	15	2
小計	20	13
省略	15	10
計	84	95

WH 句に直接「カ」がつく場合、その過半数は反語、すなわち修辞疑問文になっていることが (5) のデータから読みとれるが、特に、ム系助動詞の中でも「ム」が文末

にくるときにその割合が非常に高くなっていることがわかる。

ム系助動詞は従来、推量の助動詞として扱われてきたものだが、野村 (1995b) で論じられているように、現実世界での成立を言明しない事態を示すモダリティ表現 (野村は想像性と呼んでいる) として理解するのが適切である。このような視点に立つと、英語にも修辞疑問文に関して類似の現象が存在することに気付く。Dikken and Giannakidou (2002) が指摘していることだが、WH 句に *the hell* がついた場合、モーダルが (6 b) のように共起すると修辞疑問文の解釈が強制される。

- (6) a. Who the hell bought the book?
b. Who the hell would buy the book?

同様の現象は、ギリシャ語、ハンガリー語、スペイン語など多くの言語で見られるという。そうすると、平安時代の係助詞「カ」を *the hell* と等価なものとみなし、いずれもモーダルの助動詞 (平安時代では特に「ム」) との組み合わせで修辞疑問文の意味を生じると考えてよいだろう。その際、モーダルの助動詞の背後にある可能世界意味論的要因が重要な働きをするのだが、そのテクニカルな分析は Dikken and Giannakidou (2002) に譲る。とにかく、同様の分析が平安時代の日本語にもあてはまるという結論になる。

「カ」が *the hell* と等価であれば、*the hell* は WH 句に義務的な要素ではなく、かつ WH 句以外にはつかないので、(3 i) と (3 iii) も無理なく説明できる。

次に、WH 移動が存在していた奈良時代までの日本語におけるム系助動詞のふるまいをみるが、ここでも、他の言語で起こっていることがやや形を変えつつも古代日本語にあらわれているのを確認することになる。

3. 萬葉集あるいはそれ以前の「ム」

まず、萬葉集の疑問文におけるム系助動詞の分布を見ると、(7) のようになる。

- (7) 萬葉集の係助詞「カ」とム系助動詞 (野村 1995a)

「カ」の上接語	総数	うち文末ム系助動詞	ム系助動詞の%
理由の副詞	149	49	33 %
主語	54	22	41 %
その他	269	233	87 %

このデータは、野村 (1995a) で提示されているのをやや加工したものである。野村データは係助詞「カ」を伴う疑問文すべてについてのものになっているが、萬葉集の時代では平安時代と違って Yes-No 疑問文にも「カ」が生じていたので、(7) の中から Yes-No 疑問文を除いて WH 疑問文だけにしぼると (8) のデータが得られる。¹

(8) 萬葉集の「カ」を伴う WH 疑問文とム系助動詞

「カ」の上接語	総数	うち文末ム系助動詞	ム系助動詞の%
理由の副詞	66	28	42 %
主語	18	9	50 %
その他	109	102	94 %

萬葉集の Yes-No 疑問文では、係助詞「カ」や「ヤ」のついた句が WH 句と同じように移動していたのだが、WH 疑問文だけでなく Yes-No 疑問文でも焦点にあたる要素が移動している言語は必ずしも多くない。WH 疑問文にデータをしばったのは、なるべく同じ条件で言語間の比較をするためである。

ところで、(8)では、すべての環境で(7)よりム系助動詞のあらわれる割合が多くなっている。これは、Yes-No 疑問文より WH 疑問文の方がム系助動詞との結びつきが強いことを意味している。Yes-No 疑問文では、係助詞「カ」がマークする句が必ずしも焦点になっているとはいいがたい場合があることを野村(1995a, 2001)が確認しているが、ム系助動詞出現の頻度の差はこのことと関係しているのかもしれない。近藤(1997)によると、Yes-No 疑問文での非焦点の読みはム系助動詞とともにあらわれる傾向があるという。将来の課題としておきたい。

さて、(7)と(8)のいずれを見ても、「カ」が理由の副詞や主語についている場合とそうでない場合とでは、ム系助動詞出現の割合が大きく異なっていることがわかる。WH 移動に際して、理由の副詞や主語が移動する場合に、それ以外の要素の移動とは違ったパターンを取ることは、様々な言語で観察されているが、萬葉集の言語もそうした文法システムの名残りを見なしていいのではないだろうか。つまり、萬葉以前の段階では、WH 移動に付随して(9)のような現象が生じていた、と考えるのである。

(9) 萬葉以前の WH 移動

- a. 主語の移動 : 連体形
- b. 理由の副詞の移動 : 連体形 & 「ガ/ノ」主語
- c. それ以外の要素の移動 : ム系助動詞 & 「ガ/ノ」主語

ム系助動詞では連体形と終止形が同形だが、「ガ/ノ」主語を取ることから(9c)も連体形とみなしてよいかもしれない。萬葉集から、(9)のパターンにあてはまる例文を(10)にあげておく。

- (10) a. 春柳かづらに折りし梅の花誰か浮かべし酒坏の上に (840)
- b. 海山も隔たらなくになにしかも目言をだにもここだ乏しき (689)
- c. 春日野の藤は散りにて何をかもみ狩の人の折りてかざさむ (1974)

当初、ム系助動詞は主語や理由の副詞以外のものが移動するときに限られていたのだが、その区別がすでに崩壊して主語や理由の副詞が移動する場合にも見られるようになる一方、従来その出現が義務的であった環境で義務的ではなくなりつつあるのが萬

葉集の段階である。(9)にかわり、あらたに(11)のシステムが成立する。

(11) 萬葉集の WH 移動

- a. 主語の移動 : 連体形
- b. それ以外の要素の移動 : 連体形 & 「ガノノ」主語

萬葉以前の文法システムを探る手がかりになる資料がない以上、(9)は憶測にとどまるが、以下列挙する様々な言語の WH 移動を考慮に入れると、UG (普遍文法)の許す選択肢のひとつとして十分認めうる。また、(9)から(11)への変化はパラダイムの簡略化として理解できるものでもある。

では、WH 移動に付随する現象を、イタリア語、チャモロ語、パラオ語の順で見たいこう。イタリア語では(12)のパターンを示す。

(12) イタリア語の WH 移動

- a. 主語の移動 : 動詞の後ろからのみ可
- b. 理由の副詞の移動 : 主語倒置なし
- c. それ以外の要素の移動 : 主語倒置

主語が移動するとき、その元の位置が動詞の後ろであることは、Rizzi (1982) が接辞 *ne* の分布をもとに証明している。イタリア語の主語は動詞の前にも後ろにも生起しうるのだが、(13 b, c) が示すように、主名詞を欠く主語が動詞の後ろにくる場合は接辞 *ne* が義務的に生じなければならない。

- (13)
- a. Quante *(ne) sono cadute *t*?
how-many (of them) are fallen
 - b. Alcune (*ne) sono cadute.
some are fallen
 - c. *(ne) sono cadute alcune.

主語が WH 句のとき、(13 a) のように、やはり接辞 *ne* が義務的に生じるのである。また、主語以外の WH 句が移動するとき、主語は、(14 a, b) が示すように、通常、動詞の後ろへ倒置されなければならないが、WH 句が理由の副詞であると(14 c) が示すように WH 句と(助)動詞の間に生じてもかまわない。

- (14)
- a. Cosa ha fatto Gianni?
what has done Gianni
 - b. *Cosa Gianni ha fatto?
 - c. Perché Gianni è partito?
why Gianni is left

この現象の統語分析の詳細は Guasti (1996) や Rizzi (1996) を参照。ここで重要なのは、移動する WH 句が主語であるか、理由の副詞であるか、それ以外の要素であるかが WH 疑問文の形式に大きな影響を与える区別であるということである。萬葉以前として想定した文法システムでも同じ区別を設けているわけで、これはそもそも UG が用

意したものと理解するのが妥当だろう。

同様の区別はチャモロ語でも見られる。この言語では、WH 移動に付随する形態・統語現象が表面上かなり複雑な様相を呈すのだが、紙幅の都合上、やや簡略化したものを(15)にまとめる。詳細は Chung (1998) を参照されたい。

(15) チャモロ語の WH 移動 (簡略版)

- a. 主語の移動 : 他動詞の主語一致マーカ―を挿入辞-um-で置換
- b. 理由などの副詞の移動 : 変化なし
- c. 目的語の移動 : 動詞の名詞化および挿入辞-in-追加 (随意的)
- d. それ以外の要素の移動 : 動詞の名詞化

イタリア語と同様、主語の移動と理由の副詞の移動はそれ以外と異なったパターンを示す。(16)に他動詞主語の移動、(17)に理由の副詞の移動の例をあげる。²

- (16) a. Ha-fa'gasi si Juan i kareta.
E3sg-wash Juan the car
“Juan washed the car.”
- b. Hayi f-um-a'gasi i kareta.
who UM-wash the car

- (17) Sa' hafa na ma-dingu Sa'ipan?
because what C E3pl-leave Saipan
“Why did they leave Saipan?”

古代日本語との関係でおさえおくべきことは、目的語その他の移動で、動詞が名詞化されるという点だろう。これは、具体的には主語一致マーカ―が所有者のマーカ―と同じ形態を取ることを意味する。(18b)は(18a)の目的語をWH句にした疑問文だが、(18b)の三人称単数の主語一致マーカ―は、(18a)の目的語の所有者を示す *ña* と同じ形になっている。

- (18) a. Ha-fahan si Maria i sanhilo'-ña gi tenda.
E3sg-buy Maria the blouse-her Loc store
“Maria bought her blouse at the store.”
- b. Hafa f-in-ahan-ña si Maria gi tenda?
what IN-buy+Nmlz-her Maria Loc store

古代日本語では、格助詞「ガノノ」が連体形の文の主語のマーカ―にも所有格にも用いられる。そのWH疑問文が連体形を選択するということは、結局、チャモロ語と古代日本語が基本的に同じ文法システムを採用しているに他ならないことを意味する。文レベルの文法関係と名詞句レベルの文法関係で同じ形態を利用しているのである。WH移動に付随して様々な形態・統語現象が見られるという一般言語学上の認識さえあれば、係結びに連体形がもちいられるということも、そのうちの一つのオプションを古代日本語が選択していたという程度の観察におさまり、何ら驚くに値しない。も

ちろん、この結論に達するのに、古代日本語において WH 移動が存在していた事実の確認が欠かせないステップであることは、多言を要しない。

その意味で注目に値するのは、平安時代に入り、係結びや疑問文とは関係なく連体形で終止する文が会話文を中心に増加していったことである。WH 移動がなくなれば、連体形を WH 移動に付随する形態変化と見なす必要はなくなるわけで、通常の平叙文に連体形が進出する条件が整う。小林 (1987) によると、疑問文も含めすべての種類をあわせた源氏物語冒頭からの 500 の会話文中、純粹の連体形終止は 7 例ある。多くはないように見えるが、500 のうちに言いさしが 2 割弱あり、連体・終止同形の述語もあることを考慮に入れれば、萬葉集全体で野村 (1995a) によると連体形終止が 20 例少々であるのより増加しているのは明らかだろう。実際、吉田 (2001) による平安時代散文文献の調査では、終止形と連体形の形態上の区別がある動詞で文が終了している会話文の場合、係結びなどではない連体形終止と終止形終止は「アリ」の場合を除きほぼ同数という結果が出ている。「アリ」や形容詞では終止形終止の方が圧倒的に多いので、連体形終止は環境を選びつつ進出していったことがうかがえる。

以上は、(11) にまとめた萬葉集の文法システムで中核をなす連体形に関してであった。萬葉集以前として想定した(9)についてはどうであろうか？この問題を考える上で参考になるのがパラオ語である。Georgopoulos (1985, 1991) に基づき、やはりやや簡略化してまとめたのが(19)である。

(19) パラオ語の WH 移動 (簡略版)

- a. 主語の移動 : 主語一致マーカー削除
- b. それ以外の要素の移動 : irrealis

パラオ語の完了 (例文中では PF であらわす) 動詞は、主語と目的語の両方との一致マーカーを(20)のような形で伴っている。

(20) agreement(subj)-V-agreement(obj)

(21) に他動詞文の例文をあげる。³

- (21) a. ng-?illebed-ii a ?obok-uk a Miriam.
R3sg-PFhit-3sg brother-1sg Miriam
“Miriam hit my brother.”
- b. ke-?illebed-ii
R2sg-PFhit-3sg
“You hit him.”

パラオ語の WH 移動は随意的だが、(19 a) の主語一致マーカー削除は、主語が移動したときのみ起こる。従って、WH 句がもとの位置にとどまっている(22 a) は通常の平叙文と同じ動詞の形態で、文頭に移動した(22 b) ではじめて主語一致マーカーが削除される。

- (22) a. ng-kileld-ii a sub a te?ang.
R3sg-PFheat-3sg soup who
b. ng-te?a [a kileld-ii a sub]
CL-who R-PFheat-3sg soup
“Who heated up the soup?”

目的語が移動した場合は、irrealis と呼ばれるムード形式を動詞がとる。(23)がその例である。

- (23) ng-ngera [a le-silseb-ii a se?el-il]
CL-what IR3-PFburn-3sg friend-3sg
“What did his friend burn?”

同様の動詞の形態変化は、(24)のように話題化の場合でも生じる。

- (24) a. a Naomi [a rirell-ii a kliou el mo er ngak]
Naomi R-PFmake-3sg dessert LK go P me
b. a kliou [a l-lirell-ii a Naomi el mo er ngak]
dessert IR3-PFmake-3sg Naomi LK go P me
“Naomi made a dessert for me.”

パラオ語が示しているのは、WH 移動に伴う述語の形態変化として、通常とは異なるムード形式の使用が UG での可能な選択肢のうちにあるということである。萬葉集以前の(9)でも、WH 移動に伴う形態変化はム系助動詞の使用というムード形式にかかわるものを想定したのだが、モダリティ表現の使用という点でパラオ語と類似しているといえよう。注意しておくが、パラオ語のモダリティ表現は、WH 疑問文では意味的貢献を何もしていない。文法上の要請のみによって使用されているのである。萬葉集以前の古代日本語でも同様だと考えるのが妥当だろう。その点、前節で見た平安時代の WH 疑問文でのム系助動詞の働きとは大きく異なっている。さらに、磯部(1990)の指摘するところによると、文末に「ニカ」ないし「ゾ」がある場合、すなわち(4 b, c, d)の形式では、「ニカ/ゾ」の直前に「ム」「ケム」「ラム」などの助動詞がくることが一般にないという。平安時代のム系助動詞の分布は、(9)のような文法関係に依存するものではなく、文末形式との関連で理解されるべきものなのだろう。「ニカ/ゾ」そのものがある種のモダリティ表現として働いているのかもしれない。⁴ その詳細は、将来の課題としておく。

WH 移動に伴うモダリティ表現の文法的使用は英語にも存在する。英語の直接疑問文で主語・助動詞転倒が見られるのはよく知られているが、対応する平叙文に助動詞がないときは、虚辞の *do* が用いられる。(25 b, c) がそれに相当する例文である。

- (25) a. Who left Saipan?
b. Why did he leave Saipan?"
c. What did she buy?

と同時に、(25 a) が示すように、主語が移動するときは主語・助動詞転倒が生じない。まとめると(26)になる。

(26) 英語の WH 移動 (直接疑問文)

- a. 主語の移動 : 変化なし
- b. それ以外の要素の移動 : 主語助動詞倒置

虚辞の助動詞 *do* の特徴は、不定詞節に生起しないことで、これはモーダルの助動詞と共通の性質である。従って、助動詞 *do* を意味的貢献をしないモーダルの助動詞と見なすことも可能なわけである。

4. 結語

以上、古代日本語を分析していく際に、一般言語学的見地が非常に重要であることを確認してきた。萬葉集以前や平安時代でのモダリティ表現としてのム系助動詞が果たしている統語的役割は、UG の観点からしてほぼ等価であると考えられる統語環境において、どのような現象が様々な言語で観察されるかを考慮に入れることによって始めて、理解が可能になるのである。分析をまとめると以下のようなようになる。

- ・平安時代では、係助詞「カ」が英語の *the hell* と等価であることから、ム系助動詞 (特にム) の可能世界意味論上の意味との組み合わせで修辞疑問の解釈を生じた。
- ・萬葉集以前の時代では、WH 移動に伴う述語の形態変化の UG 上の選択肢としてム系助動詞が用いられた。ム系助動詞は主語や理由の副詞の移動には生じなかったが、これもまた UG が WH 移動の際様々な言語で区別して扱っている統語環境である。
- ・萬葉集の連体形による係り結びも、同様に、WH 移動に際して UG で許容されるオプションのひとつである。

萬葉集以前を直接知る手がかりになる資料がないため、萬葉集のデータからの復元という手続きを取らざるを得ないが、Serafim and Shinzato (2000) による復元でもム系助動詞が想定されており、そこで論じられている沖縄方言との関連が信頼性の高いものであれば、より信憑性が増すであろう。

注

* 関西言語学会第27回大会のシンポジウムの際、あるいはその前後で、参加者ならびに他の講演者の方から貴重なコメントをいただいた。

¹ (8) は、(7) のベースになっている資料を野村剛史氏に提供していただいたものに基づいて作成した。野村氏の御好意に感謝したい。

² E は能格の略。

³ 例文中の略号は次の通り。R: realis, IR: irrealis, PF: perfective, sg: singular, CL: cleft.

⁴ 「ニカ」の背後にある連体接続の「ナリ」については高山 (2002) 参照。

参考文献

- Chung, Sandra (1998) *The Design of Agreement*, Chicago, University of Chicago Press.
- Dikken, Marcel den and Anastasia Giannakidou (2002) "From hell to polarity: Aggressively non-D-linked wh-phrases as polarity items," *Linguistic Inquiry* 33, 31-61.
- 船城俊太郎 (1968) 「平安時代漢文訓読疑問詞疑問文の一文型」 『国文学言語と文芸』 58, 17-26.
- Georgopoulos, Carol (1985) "Variables in Palauan syntax," *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 59-94.
- Georgopoulos, Carol (1991) *Syntactic Variables*, Dordrecht, Kluwer.
- Guasti, Teresa (1996) "On the controversial status of Romance interrogatives," *Probus* 8, 161-180.
- 磯部佳宏 (1990) 「中古和文の要説明疑問表現一 『源氏物語』 を資料として」 『日本文学研究』 26, 165-176, 梅光女学院大学.
- 小林千草 (1987) 「近代語の文法」 山口明穂 (編) 『国文法講座第五巻』 明治書院、東京.
- 近藤要司 (1997) 「係助詞の複合について (一)」 『金蘭国文』 創刊号, 9-36.
- 野村剛史 (1995a) 「「カ」による係り結び試論」 『国語国文』 64 巻 9 号, 1-27.
- 野村剛史 (1995b) 「ズ、ム、マシについて」 『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』 明治書院、東京.
- 野村剛史 (1996) 「ガ・終止形へ」 『国語国文』 65 巻 5 号, 524-541.
- 野村剛史 (2001) 「ヤによる係り結びの展開」 『国語国文』 70 巻 1 号, 1-34.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*, Dordrecht, Foris.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual verb second and the wh-criterion," in *Parameters and Functional Heads*, Adriana Belletti and Luigi Rizzi, eds., Oxford, Oxford University Press, 63-90.
- Serafim, Leon A. and Rumiko Shinzato (2000) "Reconstructing the Proto-Japonic kakari musubi,... ka ...-(a)m-wo," 『言語研究』 118, 81-118.
- 高山善行 (2002) 『日本語モダリティの史的研究』 ひつじ書房、東京.
- 吉田茂晃 (2001) 「文末用言の活用形について」 『山辺道』 45, 1-16.
- 渡辺明 (2001) 「ミニマリストプログラム入門 (6) - (7)」 『月刊言語』 30 巻 7 号, 98-103, 8 号, 90-95.
- Watanabe, Akira (2001) "Loss of overt wh-movement in Old Japanese and demise of "kakarimusubi"," in *Proceedings of the COE International Symposium*, Kazuko Inoue and Nobuko Hasegawa, eds., Kanda University of International Studies, 37-57.
- Watanabe, Akira (2002) "Loss of overt wh-movement in Old Japanese," in *Syntactic Effects of Morphological Change*, David W. Lightfoot, ed., Oxford, Oxford University Press, 179-195.